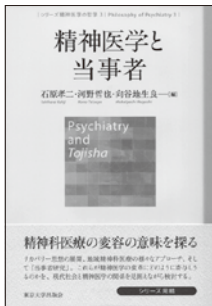


## ■ 書 評



### シリーズ精神医学の哲学 3 精神医学と当事者

石原孝二, 河野哲也, 向谷地生良 編  
 東京大学出版会  
 2016年11月 272頁  
 本体価格 4,800+税

精神医学が医学界の外側からどう見られているかは、内部にいる精神科医としても興味のあることではないであろうか。医師の中でも、精神科医はどうも変わり者と見られているらしいし、昔は公然と精神科は医学ではないと主張する医師もいたものである。医師仲間はともかく、世間からは精神医学はどう見られているのであろうか。いやそこまで外の範囲を広げなくとも、精神医学が医学の一分野であるとすれば、医学を含む自然科学や人文科学の世界からは精神医学はどう見られているのであろうか。

本書は科学哲学を専攻している石原孝二が中心となって編集した「シリーズ精神医学の哲学」の第3巻である。執筆者は哲学、医学史、文化人類学、社会福祉学などを専門とする方々である。精神科医もこれに参加している。多くは大学で教職にある人たちであるが、第3巻は「精神医学と当事者」がテーマになっているので、当事者でもあり研究者でもある方々も含まれている。

全体は3部に分かれており、第1部は「精神医学と現代社会」、第2部は「精神医学と地域社会・家族」、第3部は「精神医学の変革と当事者研究」となっている。巻頭に編者の石原による「精神医学と当事者」と題した総論が置かれている。それぞれの部の前にも概要が書かれているので、長い論文であってもはじめから順に読んでいくと理解がしやすい構成となっている。第1部ではバイオポリティクスの視点から見た精神医学、疾患喧伝、学校におけるメンタルヘルスなど、精神医学と現代社会の関係を論じた論文がならんでいる。第2部ではリカバリー概念や精神科医療シス

テムと家族の問題が論じられている。この2つの論文の間に、イタリアにおけるトリエステモデルとオープンダイアログを紹介したコラムが置かれている。第3部ではいわゆる当事者研究として、浦河べてるの家での活動、発達障害当事者による考察、薬物依存と慢性疼痛について論じられている。著者の学問的な背景がさまざまであったり、論文の体裁も定型的な学術論文的ではなかったり、論文ごとに論考する範囲や深みも異なったりするものの、本書はむしろこれらの多様性を評価しながら読んでいくべきものなのであろう。

編者の石原は本書のまえがきに「精神医学は今、大きな転換点に差し掛かっており、その全体像を捉えなおすことが迫られている」とある。書評子は正直をいうと、精神医学に対して社会学者が評論家然として高見に立った議論をすることは好きではない。口べたな臨床家が多少の勘違いはあっても実践されている仕事は、社会学者がそれを批判しようと、それなりに尊重されるべきと考えている。しかし、それだからといって自分たちの実践している医療が、社会の側や当事者の側からどう見られているかということに鈍感であってはならないと考えている。精神障害に対して医学的なモデルからなかなか抜け出すことのできないわれわれ臨床家にとって、医学の外からの視線を理解し、精神医学をある意味で相対化する視点も必要なのではないだろうか。本書ではそれを精神障害の当事者の側で活躍する人たちからの論考が集められている。指摘される点については、痛いところを突いてくるなど感じることもあるし、精神医学側の問題とは必ずしもいえず、医学全体あるいは医療制度の問題ではないかと反論したくなることもある。それらを含めて、一度どっぶりつかった多忙な臨床を離れ、このような本をじっくり読む時間をとることも臨床家としては必要であろう。シリーズ全3冊を読み通すことは大変かもしれないが、もし当事者の側から見た精神医学を知りたければ、本書の購入だけでもお勧めする。刺激的な論考が続くので、おそらく他の2冊も読みたくなるのではないだろうか。

(仙波純一)